

官邸崩壊

高嶋哲夫

第二回

第一章 襲撃（承前）

5

警視庁本部庁舎は、首相官邸から東北東へ約一・三キロ、徒歩十分ほどの所にある。

皇居南側の出入り口、いわゆる「桜田門」さくらだもんの前だ。地上十八階、地下四階の建物で、約四万四千人の警察官が所属する総本山だ。

これは人口当たりの警察官としては全国平均の二倍であり、他の道府県と比べて段違いの規模となっている。単に東京という地方自治体を管轄する警察というだけでなく、首都警察として皇族の警衛、国会や大使館など重要施設の警備、国内外の要人警護などの役目も担う巨大組織だ。

警備部警護課は十六階にある。

すでに課内の三分の一は帰り、残りの者も帰宅の準備を始めていた。

鳴り始めた受話器を取った横田恭介きょうたけいすけは全身が強張りこわばり、思わず受話

器を落としそうになった。

横田の表情の変化に気づき、部屋中の視線が向けられた。

「官邸が占拠された。本当かそれは」

横田は室内の全員に聞こえるように大声を上げた。

自分でも間抜けな言葉だと思っただが、部屋中の視線を自分に集めるには最適だった。電話機をスピーカーにした。緊張が走り、全員が動きを止めて神経を横田と受話器に集めている。

横田恭介は警備部警護課長だ。来月、五十三歳の誕生日を迎える。何事もないようにと祈りつつ警備部に来て三年、来年あたりは異動になる。

警視庁警備部警護課は要人警護を行う。セキュリティポリス（SP）とは彼らの通称だ。第一係が首相、第二係が国務大臣、第三係が外国要人および機動警備、第四係が都知事と政党要人の警護を担当している。官邸警備隊は施設警備部隊であるため、同じ警護課所属ではあるがSPとは呼ばれない。

「どこから連絡が入った」

「官邸警備隊からです。官邸内から銃声がして、官邸の出入り口のシャッターが下ろされました」

官邸周辺の警備は、官邸警備隊と機動隊が連携して行っている。官邸前の道路には移動式の金属製バリケードも設置され、許可のない車両は通行できないよう規制している。

「警護官からの連絡はないのか」

「こちらからは掛けていますが、携帯電話は通じません。官邸内で妨害電波が出ているようです。固定電話もどれも通じません。回線が切られています」

「犯人について分かっていることを教えてくれ。人数、国籍、所有武器、その背後、すべてだ。どこから犯行声明は出ていないのか」

横田は話しながら出動準備をするよう横にいた部下に合図した。

部下は頷いて部屋を出て行く。隣の部屋で関係部署と連絡を取り合うためだ。

「不明です。現在、隊長が連絡を取ろうとしていますが、官邸とのすべての通信手段がカットされています。復旧を試みっていますが、今のところ原因を調査中というところですよ」

「他に分かっていることはないのか」

思わず声が大きくなった。すべてが不明だ。これではどう対処すべきか決めようがない。

「横田警護課長ですか。本当に何も分からないのです。うかつに踏み込むわけにはいきません。中には総理、アンダーソン米国防務長官をはじめ、官房長官と数名の大臣もいます」

突然、声が変わった。官邸警備隊の隊長、鈴木^{すずき}だ。鈴木は機動隊時代、横田の部下だった男だ。

「十分以内にそっちに行く。それまでに動きがあれば、連絡してくれ」

電話を切ると矢継ぎ早に指示を出した。

「人質を取つての立て籠もりだ。場所は総理官邸。ただちにそつちに向かう。全員に招集をかける。非番の者にもだ」

「人質の人数は？」

「アメリカ国務長官を迎えての晩餐会の途中だ。すぐにリストを作つて関係者に回せ」

「犯人の目当ては日本国の総理とアメリカの国務長官ですね。あとの者は巻き添えと考えていい」

「まだ不明だ。推測は禁止だ。人質が誰であろうと、何としても、救出しなければならぬ。ここには連絡要員として二人を残して、その他の者は俺と一緒に官邸に行く」

横田は言い残して部屋を飛び出した。課員がその後が続く。

人質が二つのグループに分けられて大ホールに集められていた。全員で百人あまりいる。

晩餐会の客が三十二人。残りは官邸に残っていた職員と外来者だ。記者クラブにいたマスコミの者もいる。

ホールの一角にはスマホと携帯電話の山ができていた。

ライアンが晩餐会の客の顔を一人ひとり見ていく。

新崎が睨み返しても気にも留めない。ひと通り見て歩くと、部屋の隅に行った。何事か考えていたが、部下の一人を呼んだ。

「これだけか」

「エントランスホールにも拘束しています。連れてきましょうか」

ライアンはしばらく考えていた。

「そのままでもいい。全員で何人くらいだ」

「エントランスホールの者を入れると、百名を超えらると思われれます」

「他の階にいる者もエントランスホールに連れていけ。ただし、こいつらとは分けておくように」

部下は短機関銃を構え直すと大ホールを出て行った。

「安全な衛星電話はまだセットできないのか」

「あと一時間ほどかかりそうです。屋上に出ればつながりますが危険です。セキュリティにも問題があります」

「スワンはまだ見つからないのか。衛星電話がつながる前に見つかる」

「全力でやっていますが、人質の人数が多い上に、官邸が広すぎて」

「アメリカサイドで動き出す前に、必ず俺の前に連れてくるんだ。さもないと——」

アレンがライアンのところにやってきた。青ざめた顔をしている。

「約束が違う。すでに十人以上の死者が出ている」

「あんたは間違っている。二十七名だ。ここは広い。他でも同様なことが起こっている。あんたは科学者だろう。数字には正確であつてほしい」

「これ以上の死者は出さないでくれ。私たちはテロリストではない」
「同じだ。巨大な権力に立ち向かおうというんだ。並みの方法じゃ太刀打ちできない。それなりの覚悟と犠牲が必要だと言ったはずだ」

「それがこれらの殺人か」

「革命のための犠牲者と言ってほしいね。彼らはいずれ称えられる。我々は同じ列車に乗り合わせたんだ。個人の意思では、もう降りることはできない」

ライアンは薄笑いを浮かべながら言う。

「要求はいつ伝えるんだ。官邸内は電話回線は切られていて、妨害電波を出している。スマホはつながらないはずだ」

「官邸内が完全に掌握できてから通信は回復させる。今はそのことに集中したい。焦るとロクなことはない。あんたも気を楽にしてろ」
ライアンはアレンの肩を軽く叩くと仲間の方に行った。

6

6

梶元雄一郎は赤坂の自宅マンションにいた。

夕食の前に風呂に入ったらと妻に言われ、風呂場で服を脱ぎ始めたところだった。

電話を受けたのは妻だった。電話の相手は内閣府の藤田ふじたと名乗った。十分後に迎える車が行くという。あわてて子機を持って、風呂場に走った。

「要件は？」

「車の中で、警護官が現在の時点で判明していることをお話しします」

電話では話せないということか。声と言葉の様子では、ただ事ではなさそうだった。

脱いだばかりの服を着直してマンションのロビーに降りると、二人の警護官と黒のセダン、二台のパトカーが待っていた。前には秘書官の長森春行ながもりはるゆきが待っている。この温厚な顔をした秘書は梶元の頭の中が見えていると思うことがあった。子供のいない梶元は、自分の次はこの男と考えているが、それすらも見えているのか。

通行人が何ごとかと立ち止まって見ている。

警護官に付き添われて車に乗り込むと、中には新崎総理の警護官の一人が乗っている。

「総理官邸が何者かに占拠されました」

「新崎総理は無事なのか」

「官邸内です。まだ連絡は取れていません。これから警視庁に向かいます。臨時の危機管理室が設置されています」

「官邸が使用不可の場合、危機管理室は市ヶ谷いちがやではないのですか」

「言い方が悪かったようです。警視総監が副総理にお話があるそうです」

警護官が言い直した。

「占拠グループから、なにか要求はありましたか」

「連絡は取れていません。こちらから、呼びかけてはいるのですが。

固定電話も携帯電話も通じなくなっています。電話回線を切り、携帯電話の電波をかく乱させているようです」

前後をパトカーに先導されて警視庁に向かった。

近づくにつれて車のスピードが落ちた。警察関係の輸送車とテレビ局のバンが目につき始めた。野次馬らしき群衆も増え、官邸に向かつて進んでいる。

「半径何キロかは立ち入り禁止区域にすべきですね。警察、消防、いずれは自衛隊の車を優先するように」

梶元は独り言のように言った。警護官が梶元を見ている。

警視庁の大会議室は人であふれていた。そのほとんどが制服姿でスーツ姿は数えるほどだ。

警護官はその前を素通りして警視総監室に向かった。

「総理と外務大臣、経産大臣が人質として官邸内に閉じ込められています。私たちは梶元副総理の指揮下に入ることとなります」

梶元は混乱していた。総理が職務継続困難になったときには、副総理が後を引き継ぐことにはなっている。しかし、副総理とは長老的な政治家を敬意を込めて処遇するのに用いる俗称であり、正式なものではない。日本の場合、アメリカの副大統領のように継承順位が明文化されておらず、その時々で協議する形で対処してきた。

内閣法第九条には「内閣総理大臣に事故のあるとき、又は内閣総理大臣が欠けたときは、その あらかじめ 予め指定する国務大臣が、臨時に、内閣総理大臣の職務を行う」とされているだけだ。

歴代内閣は、あらかじめ臨時代理予定者五名を指定するようになっていいる。その順位は、官房長官以下、大臣歴および議員歴を考慮

して決められる。その結果、官房長官ではない者が第一順位として指定されるときに、「副総理」と通称するようになった。

新崎総理は常日頃相談役としていた梶元を副総理と指名していたのだ。自分が職務を継続できない状況になるうとは、思ってもいなかったに違いない。それは、梶元本人にも言えることだ。

自分には心の準備などできてはいない。また、その能力もなく、その器でもない。そのことは自分自身がいちばんよく知っている。

新崎総理が自分を副大臣に選んだのは自分をそばに置くことで、抵抗勢力が少しはおとなくなると感じたのだろう。年寄りをいじめるのは誰しも躊躇ちゆうちゆうするだろうし、体裁ていざいが良くない。

そして、その思惑は半分は当たっている。与野党を含めて、自分が最年長だ。今期限りで引退を考えていた。街を歩いていても、当選十五回の大臣、衆議院議長経験の国会議員だとは誰も思わない。見かけも小柄でひなびた年寄りだ。

梶元はドアの前で立ち止まり、一度大きく息を吸った。思わず足元がふらついたが、長森が支えた。

心持ち背筋を伸ばして部屋に入ってしまった。

部屋の中には十人余りの男がいた。全員が立ち上がり、梶元に向かって姿勢を正した。警視庁、警察庁の幹部だろう。

「お待ちしておりました」

高山警視総監たかやまが梶元に向かって頭を下げた。横には田島警察庁長たじま官もいる。高山が中央にいるのは警視庁が現場を統括し、指揮を執

っているからだ。今後もそうだという意思表示でもある。

「総理の無事はまだ確認されていないのですか」

「官邸で会食中のメンバーは全員が拘束されています。現時点において、安否確認はできていません」

「犯人の正体と要求は何ですか」

「正体はまだ分かっていません。今のところ、要求は何もありません」

「こちらからテログループに対して、呼びかけていますか」

「官邸内とは電話回線もインターネットも、携帯電話もすべてが通じません。立て籠もり犯たちは、何らかの方法で通信をシャットダウンしているようです」

警視庁はテログループと呼ぶのは嫌なようだ。しかし立て籠もり犯とは呼べない時がすぐに来る。

「どのくらいの時間がたっていますか」

「三十分程度です。発生後、直ちに副総理に報告いたしました」

「官邸で何が起こったかはつかめていないんですね。例えば、犠牲者が出たとか。銃声がしたと聞きましたが」

梶元は矢継ぎ早に質問した。早急に事態を把握して、指示を出さなければならぬ。

「エントランスホールにいた官邸警務官の話だと、拳銃と短機関銃で武装した十名あまりの男が警護官を射殺したということです。警務官二名が入口ドアが閉じられる前に逃げ出しました」

「目的は総理か米国務長官か。まだ、分かりませんね」

「おそらく総理でしょう。わざわざ日本でアメリカの国務長官を拘束するとは考えられません。しかし、何も警護の嚴重な米国務長官が訪日の日を狙うことはない——」

「あらゆるケースで対策を考えてください。アメリカ政府からは何か言ってきていますか。すでに事件のことは知っているでしょう」

梶元は官邸方面に向かうマスコミの車列を思い出していた。

「至急詳細を知らせるようにと言ってきました。在日米軍には、まだ動きは見られません」

分かったという風に、梶元は言葉には出さず頷いた。

おそらく出動準備はできている。部隊の展開は最高度の機密事項だ。

「ドナルド大統領と話したい。直ちに準備をしてください」

好きな男ではないが、我が国を訪問した国務長官が総理官邸でテロ集団の人質になったのだ。ひと言、謝っておかなければならない。

「いや、私が話すのはもう少し待った方がいいか。報せるべき情報が何もない。あの大統領は何を言い出すか分かりません」

分かりましたと、秘書官が頭を下げた。

「アメリカにはできる限りの便宜べんぎを図ることにします。情報を共有するという意味です」

「マスコミが大騒ぎです。早急に会見を開いた方がいいでしょう。これ以上延ばすと、デマが飛び交い、官邸に押しかける恐れがあり

ます」

「総理と一緒にの関係は？」

「富田官房長官と、氏家外務大臣です」

梶元はゆっくりと息を吸い込み吐いた。

「できる限り早く、官邸内部と連絡を取ってください。必要ならば私が直接、犯人たちに問いかけてみます。新崎総理はなんとしても救い出さなければならない」

梶元は、最後の言葉に特に強い決意を込めた。

急遽、警視庁内に危機管理センターが設置された。

そのとき、一人の男が警護官に連れられて部屋に入ってきた。自由党幹事長、荒木勇造だ。次期総理を狙っていると言われている。

梶元は前方の大型モニターに目を向けた。

正面の壁に六分割された大型モニターがある。様々な角度からの総理官邸の映像が映っている。

中央の上が正面から見た映像だ。

梶元は議長席に案内された。座る前に映像を見つめた。

高感度カメラの映像だろうが、闇の中に見慣れた建物が何事もないように映っている。違うのは出入りの車もなく、人影も見えないことだ。

正面玄関にはシャッターらしきものが降りている。

「周囲二百メートルにわたって立ち入り禁止にしています」

総理官邸の近くには、国会議事堂、議員会館など政府関係の建物

が集まっている。

「五百メートルに拡大してください。立ち入り禁止区内に警察車両と、場合によっては自衛隊の部隊と車両を待機させたらどうでしょう。自衛隊との連絡は取れているか聞いてください」

無言で見つめている梶元に長森が囁いた。ささや

梶元が繰り返すと、高山が部下に確かめている。

「まだですが、至急——」

「出動準備をして待機しておくように。市ヶ谷からも連絡要員を送るように言ってください。いつでも出動できるよう、今後の会議にはすべて参加してもらいます」

まわりの様子を気にしながらスーツ姿の男が、梶元のところにやって来た。耳元に口を付けるようにして言った。

「アメリカからです。外務省を通じて、アンダーソン国務長官救出のために海兵隊の特殊部隊を派遣するとの申し出がありました」

「それはしばらく待ってもらいます。この人質事件は、あくまで国内問題です。我々は総理救出を最優先とします」

梶元は男に言った。

長森が二人の間に身体をすべり込ませるように入ってきた。

「しかし、米軍が必要とする情報は送りましょう。いつ、力を借りることになるか分かりませんから。その代わり、アメリカ側の情報もすべて送るよう伝えてください。特に国際テロ組織の情報は、アメリカの方がだんぜん多いでしょう。公開がまずい場合はその都度、

対処すればいい。それが信頼関係です」

長森が囁くと男が頷いた。長森は国際テロ組織という言葉を使った。

「マスクミが詰めかけてきています。五百メートルを目処めどに立ち入り禁止地区を設けるとなると、混乱が起きます。すでに多くのマスクミ、野次馬が制限区域内に入っています」

「五百メートル地点にプレスセンターを設置してください。警察の報道官が定期的に会見することにします。その地点以内にいるマスクミには一切情報は伝えないと行ってください。野次馬は強制退去させてください。危険を避けるためです。政府の報道官と打ち合わせをして、流せる情報はできるだけ知らせた方がいいでしょう」

梶元は矢継ぎ早に指示を出した。その声と口調には、必ず人質を救い出すという強い決意が感じられる。しかしこれも長森の助言によるものだ。

「ただちに国家安全保障会議を招集します。場所は内閣府の会議室でいいですか」

長森が梶元に聞くと、梶元は戸惑った様子ながら頷いた。

ここしばらくは、名実ともに自分が新崎総理の代理として動くことを政権内部にも宣言しておかなければならない。

荒森幹事長が驚いた表情で梶元を見ている。いつもの梶元からは想像もできない迫力だった。その横には長森が満足そうな顔で座っている。

第二章 沈黙

1

明日香は窓から外を覗いた。

正門前の外堀通りには警察車両が並び、周辺道路には機動隊員、制服警官が動き回っている。数は数百人。一般車両が見えないのは道路封鎖が行われているからだ。

日本の総理とアメリカの国務長官が官邸で人質になっている。警視庁はもちろん、日本中が大騒ぎだろう。その騒ぎは世界に広がっているはずだ。すでにどこかのテロ組織から犯行声明が出ているのか。その目的は何か。明日香の脳裏のうりに様々な疑問が駆けめぐった。

明日香は高見沢の横に座り込んだ。前にはスーザンが座り、立てた両ひざの間に顔をうずめて動かない。民間人にとっては無理もないことだ。あれだけの遺体を見たのだ。自分もその中に入る危険は十分にある。

「人質は何人くらいいるんでしょうか」

「おまえはどう思う」

明日香は高見沢に問いかけたが、逆に質問され必死に計算した。

「晩餐会ばんさんかいの出席者三十二人、厨房関係ちゆうぼうが二十三人、その他、残っていた職員が五十人ほどいたとして、百人程度でしょうか」

「この時間、職員と議員関係者は約七十人だ。官邸には百人を超え
る者が残っている。その全員が人質だ」

「私たち三人を除いてです」

明日香の答えに、高見沢の表情が陰かげしくなった。

「人質は大ホールに六十人とすると、残りはエントランスホールで
すか」

「十名以上が殺された。全員が警護官と警備員だ。テロリストは当
面の脅威を消し去ったわけだ。最初からそのつもりだったんだろう。
迷いはなかったからな」

「残りは何かと引き換えに徐々に解放ですか。数が多すぎると負担
になります」

「それはない。全員を目的達成のためのカードにするつもりだ。装
備も十分にあるし、食料は厨房にある。顔もあえて隠してはいなか
った。それだけの覚悟があるということだ。テロリストたちも引き
返せない状況になっている」

「目的って、何ですか。すでに政府には届いているのですか」

「俺に聞くな。おまえと同じ情報量しかない」

こうしていてもらちが明かない。いずれ発見されて、殺されるか
人質になるかのどちらかだ。警護官は殺されている。

「何とか下の階におりて、状況を探ってみます」

明日香は立ち上がった。

スーザンが顔を上げ、怯おびえた表情で二人を見ている。

立ち上がったものの、どうしていいか分からない。どうやって下の階に降りて、テロリストが占拠している中で状況を探るか。

「テロリストは、最初はウエイター、記者など、様々な服装でなだれ込んできた。ボスはスーツ姿。メディア関係者を装^{よそお}っていた。しかし、現在は半数以上が迷彩服だ。上着の下に着ていたか、隠していた服に着替えたか。だが、私服の者も何人かいた。ブレザー、ジーンズ、セーター」

「いくつかのグループが集まっているということですか」

「その可能性はある。日本人のグループもいた」

明日香は中ホールとエントランスホールの様子を思い浮かべた。

英語の中に日本語を聞いたような気がする。

「何を話してるのよ。私にも教えてよ」

スーザンが青ざめた顔で明日香に英語で問いかけてくる。

明日香が説明すると、真剣な表情で聞いていた。

「官邸がテロリストに占拠され、日本の総理とアメリカの国務長官が人質になっている。下で何が起こっているか知る必要がある。だから私が様子を見てくる」

「どうやって言うの。SPが見つかると殺されるでしょ」

「見つからなければいい。今まで、見つからなかったでしょ」

「運がよかっただけ。いずれ私たちも捕まって、殺されるのよ」

スーザンの声が大きくなる。目には涙が溜まっている。無理もないと明日香は思った。二時間余りで、十人以上の射殺死体を間近で

見てきたのだ。

「テロリストに変装すればいい。彼らだって数十人はいた。お互い、顔なんて覚えてないでしょ」

「危険すぎる。あなたは女性なのよ。彼らは全員が男」

「それしか方法はないでしょ。それに、全員が男とは限らないし」

明日香が高見沢を見ると首を振っている。

「俺が見たのは男だけだ」

明日香は壁際のデスクを探って、ハサミを持ってきた。

「あなた、ファッションには自信があるんでしょ。今風に切つてよ。

ただし、男性のね」

スーザンの手にハサミを握らせた。

高見沢が明日香を見つめている。英語の意味も分かっているのだらう。

躊躇ちゅうちよしているスーザンの手からハサミを取ると、髪をつかんで無

造作に一束を切り取った。

「できるだけ短く。坊主でもいいよ。急いで」

それでもためらっているスーザンを促うながすように言う。

肩まであった髪は耳が出るほど刈り上げられた。ハンカチを出して唇と目の周りを強くこすって化粧を落とした。

スーザンがカバンからサングラスを出して渡した。

「帽子をかぶってサングラスを掛ければ、ちよっと目はスリムな男でしょ」

明日香は自分自身を慰めるように言う。

「鏡は見ないことにする。出て行くのが怖くなりそうだからね。耳と後頭部がスースーする。男になった気分」

「あなたは十分にきれいよ。女としてもね」

スーザンが明日香を見つめ、慰めるように言うが、半分泣きそう
だ。

「これで、迷彩服を奪って着れば、テロリストに紛れ込むことが
きる」

「しゃべらないようにしろ。声までは変えられん」

「心がけますが——」

「容赦ようしやはするな。命取りになる。分かっているだろうな」

高見沢が明日香を見ている。明日香は頷いて立ち上がった。

「なんて言ったの。明日香は辛そうな顔をしてた」

スーザンが高見沢に英語で聞いた。

「相手は殺せ。キル・ヒム、ということだ」

高見沢が低い声で言う。

スーザンは絶句している。

しかし問題は他のテロリストに気づかれずに、殺せる距離までど
うやって相手に近づくかだ。相手は短機関銃を持ったテロリストだ。

高見沢も教えてはくれない。

「これを持って行け」

高見沢が上着のポケットから小型ナイフを出した。

「この方が強力です。デスクの引き出しにハサミと一緒に入っていました」

明日香は長さ二十センチほどのペーパーナイフを腰のベルトから出した。

スーザンに、高見沢をお願いと目で合図を送り、ペーパーナイフをしまうと、拳銃を構えなおした。

明日香は防犯カメラに注意しながら廊下を歩いた。体格の同じようなテロリストを見つけて、迷彩服を手に入れなければならない。それにはまず、二階に降りる必要がある。

エレベーターは危険すぎる。何事もなく四階に来られたのは幸運すぎたのだ。それとも、彼らの準備がまだ整っていなかったのか。

階段やエスカレーターはテロリストに姿をさらすことになるので論外だ。

明日香は給湯室に入った。部屋の隅にはダストシュートが設置されている。ゴミを捨てるダクトで、地下の集積場まで続いている。ここを通れば、各階の給湯室に行くことができる。官邸に入って二日目に官邸内を見て回ったときに知った。ただし、垂直でつかまるモノもない五十センチ四方のステンレス製のダクトだ。

ラッキーなのは蓋がネジで止められていないということだ。ダクト内部からでも蓋を押し開けることができる。覗き込むとヒヤリとした空気が吹き上げてくる。

「私がやらなきゃ、誰がやるというの」

明日香は呟いて、靴と靴下を脱いで裸足になった。

背中と両手両足をダクトに付け、落下の速さを調整しながら降りていった。少しでも力を抜くとそのまま落下してしまう。下は地下のゴミ集積場で、外からカギがかかっている。中から外には出られない。

明日香は二階の給湯室に出た。

廊下からは数人の男の音が聞こえる。銃を構えてドアをわずかに開いて外を見た。

エントランスホールには十人以上のテロリストがいるが、数が多すぎる。一人で見張りに立っているテロリストを探す必要がある。急がなくては。

2

警視庁は喧騒けんそうと緊張が入り混じっていた。

官邸前の現場とは新しく引かれた通信回線で結ばれてはいるが、目ぼしい情報は入ってこない。事態は硬直しているということか。

内閣府で国家安全保障会議が予定され、現在、大臣を招集しているという。

副総理の梶元は秘書の長森を連れて、警視庁内に立ち上がったばかりの対策本部にいた。

梶元は必死で考えていた。

テロリストに屈してはならない。これは、過去の事例から明らかだ。

人命は地球よりも重い。耳当たりがよく、国民受けする言葉だが、国際社会からは非難された。日本のテロ対応のために以後、世界でどれだけのテロが行われ、人が死傷したか。二度と同じ間違いを繰り返してはならない。

一九七〇年代、世界で日本赤軍によるテロ事件が頻発した。ひんぱつ

一九七二年のテルアビブ空港乱射事件。

一九七三年、パリ発東京行き日本航空機をアムステルダムでハイジャックし、リビアへ逃亡。

一九七四年、シンガポールの石油精製施設襲撃。

一九七五年、マレーシアのクアラルンプールでアメリカとスウェーデンの大使館を占拠。

一九七七年には、インドで東京行きの日本航空機をハイジャック。バン格拉デシュで強制着陸させて拘束中の活動家の解放と六百万ドルの身代金を要求した。日本政府は要求に応じた。

「日本は自動車や電化製品だけでなくテロも輸出するのか」と非難を浴びた。

以降、日本政府は各国に準じ、テロ事件では要求拒否を原則にし、特殊部隊の創設を進めた。

「警視庁のSATチームが待機しています。副総理の指示を待つて

います」

たかやま

警視總監の高山が来て梶元に告げた。

「指示とはどういうことですか」

「突入の指示です。副総理が決めたほうがいいかと」

「しかし、官邸内には新崎総理と、アンダーソン米国务長官がいます。さらに百人以上の人も。彼らの生命は——」

「自衛隊の対テロ部隊も出動準備ができて待機しています。ご命令でいつでも出動します。どちらを優先するかは副総理のお考え一つです」

梶元は耳慣れない言葉に戸惑っていた。警視庁のSATと自衛隊の対テロ部隊、どう違うのだ。どちらも強力な武器を持った精鋭部隊だとは聞いたことがあるが、自分には関係ない組織だと資料を読んだこともない。

「とりあえず、様子を見るのが賢明だと思います。まずは、テロリストの要求を聞いて、人質の解放を呼びかけるのがいちばんだと」

長森の落ち着き払った声で我に返った。

「それぞれの説明をしてくれ」

梶元は長森に小声で聞いた。

SATは日本赤軍による国際テロ事件に対処するために警察に作られた部隊だ。大阪、北海道、千葉、神奈川、愛知、福岡、沖縄と、国際空港や在日米軍のある地域に総員三百名体制で設置されている。部隊編成は四つの班からなっている。現場調整、情報収集、無線

担当、記録、伝令を担当する指揮班、偵察や突入支援を行う技術支援班、狙撃と偵察を担当する狙撃支援班、突入を担当する制圧班だ。

自衛隊中央即応集団にも、特殊部隊といわれる特殊作戦群が設けられている。任務、訓練、装備などすべてが機密とされ、習志野駐屯地とんちの部隊であることだけが公表されている。テロ対応の部隊で、隊員数は三百名。うち戦闘員は二百名とされ、全国規模で活動する。

「官邸内部との通信を最優先に。同時に人質の身元確認を急いでください。判明次第、家族に連絡すること。同時にマスコミにも——」

「マスコミ発表は慎重にしてください。間違った名が公表されたりすると、大騒ぎです。さらに公表を控える方もおられるかもしれません」

梶元の言葉を長森がさえぎる。梶元は頷きながら聞いている。

「やはり、犯人の意図を知ることが一番です。何とか連絡方法はないのですか」

「テロリストたちは何らかの準備をしているのでしよう。その準備ができ次第、連絡があると思われれます」

高山が戸惑いながらも言葉を選びながら言う。彼らにしても初めての事態だ。

そのとき、内閣府の職員が入ってきた。

「国家安全保障会議の準備ができました。しかし、まだ財務大臣が到着していません。外務大臣と経産大臣は人質として官邸内部にいます」

「しかし私は——」

総理ではないと言おうとしたのだ。議長は総理大臣が務める。

「今はあなたが議長です、副総理。新崎総理は官邸で捕われています。」

長森が耳元で囁く。

「場所はどこですか」

梶元が聞いた。

「内閣府の会議室を用意しています。官邸に一番近い場所です」

国家安全保障会議は、国家に対して重要と判断される事項に対して開かれる会議で、内閣総理大臣と一部の国務大臣で構成される。

議長は首相で、官房長官、外相、防衛相による「四大臣会合」と、副総理、総務相、財相、経産相、国交相、国家公安委員長を加えた「九大臣会合」がある。

緊急時には、首相、官房長官、あらかじめ首相の指示により指定された国務大臣による「緊急事態大臣会合」がある。

梶元と長森は内閣府の職員に連れられて、前後を白バイに護られた警視庁の車で移動した。

深夜にもかかわらず、街灯と投光器の光で官邸周辺は昼間のよう
に明るい。

内閣府に到着すると、職員に案内されて内閣府庁舎に臨時に設置された国家安全保障会議が開かれる会議室に入った。

警視庁の会議室とはまったく違っていた。緊張した空気にも様々

なものがある。警視庁はプロ集団の尖った刃とがやいばのような鋭さがあるが、ここはどこかまとまりのない他人事のような空気が漂っている。

「今日、午後七時二十三分、総理官邸中ホールにおける晩餐会中にテロリストが——」

警視庁警備部警護課長の横田という男が、事件の説明を始めた。

梶元の背後に控えていた長森が梶元に何事か囁ささやいた。

「それは省略してください。すでに聞いているだろうから。現状と今後の方針について説明してください」

梶元の声に横田は戸惑いながらも、テロリストからの要求は占拠後二時間たった今もないことと、人質の数は百名を超えることを説明した。さらに官邸内では短時間ではあるが銃撃戦があり、かなりの死傷者が出た模様であることを述べた。

「テロリストは少なくとも数十名、全員が短機関銃を主とした銃器で武装しています。今回の総理大臣拉致らち事件に関しては、総理を含め大臣、アメリカ政府高官もおり、人質救出を最優先にしなければなりません」

「そんなこと、分かっている。テロリストは何を目的にしている」

という声が聞こえるが、横田は声のほうを見ることもなく無視した。政治家は口だけで、現場の苦勞と努力はわかろうとしないのも思っているのだ。それは正しいのだが。

「今後の選択肢を話してください」

「人質の安全のために、交渉を最優先にしたいと思っています。警

視庁の人質交渉の担当者も待機しています。官邸との連絡が復旧次第——」

「普通の人質事件とはまったく違うんじゃないですか。人質になった者と舞台となった場所を考えれば」

「基本は同じです。いかに犠牲者を少なくするか。武力行使ではなく交渉での解決を目指します」

「相手は国際テロ組織だぞ。自爆覚悟でやっている。そんな悠長な^{ゆうちやう}ことでもいいのか」

財務大臣の言葉だ。梶元は長森を振り返った。

「それはどこからの情報ですか。我々のもとには届いていません」
横田の問いに財務大臣は黙り込んだ。情報などではなく、過去の事件から来る思い込みだ。

安全保障会議は十分ほどで終わった。武力行使はできる限り避け、交渉に重点を置くという結論だ。梶元が長森の言葉に従ったのだ。素人が議論しても時間の無駄だ。

警視庁の対策本部に戻る途中で長森が梶元に言った。

「内閣府の会議室には、官邸を映すモニターもあります。現場の様子も見られませんし、対応している警視庁からの情報も遅れます。今後は安全保障会議も警視庁に置きましょう。大臣の皆さんにも現場の空気を吸ってもらった方がよろしいかと」

「きみに任せる。で、次に私は何を——」

梶元は思わず言葉を呑み込んだ。

秘書には指示を出しても頼ることがあつてはならない。いや、長森はブレインの一人として、大いに活用すべきだ。頭には様々な思惑が交錯する。

車から総理官邸が見える。

梶元は車のスピードを落とすよう言った。光の中に官邸の壁面が美しく輝いている。

「あれでいいんですか。ライトアップされています。テロリストたちは、自分たちが監視されて黙っているのですか。これでは事を起こせば丸見えになります」

「敵の姿、行動は見えますが、我々が近づくことも困難だということですよ」

長森が落ち着いた声で言う。

梶元の脳裏に、警視庁SATチームが待機しています、という警視總監の言葉が浮かんだ。

今日の未明には、アメリカの救出部隊、デルタフォースが送られてくると報告を受けた。そうなれば、救出に三つの部隊が待機することになる。どこかの部隊が功を焦って早まった行動に出れば――。梶元の脳裏に人質、とりわけ新崎総理の顔が浮かんだ。梶元の全身に冷たいものが流れていく。早急に結論を出さなければならぬ。

明日香は靴を脱いだまま裸足で廊下を歩いた。

中ホールからは数人の男の声が聞こえてくる。英語だが、早くて単語しか聞き取れない。政治家、総理、日米、衛星電話……銃、殺す、という単語もある。

明日香は廊下の端まで行き、中ホールに続く廊下を覗いた。

迷彩服の男が短機関銃を手に立っている。身体つきは——明日香よりがっちりしているが、身長はほぼ同じだ。

短機関銃をいつでも撃てるように構え、隙のない動作で見張っている。明らかにこうした行動の訓練を受けた者であることが分かる。気づかれずに近づくことは不可能だ。ということは、男に来てもらう。

「私はいったい何を考えてる」

呟いてみたが、他に考えは浮かばない。

躊躇しながらも、上着とブラウス、ズボンを脱いで下着だけになった。

下着はどうする。高見沢なら、迷わず脱げというだろう。たしかに着けている下着はスポーツ用のモノで、色気などない機能的なものだ。しかし、そこまでテロリストを喜ばせることはない。髪に指を入れて乱そうとして、改めて髪を切ったことを思い浮かべた。

明日香は靴を壁に向かって蹴った。カタンと軽い音と同時に、男が反射的に短機関銃を音の方に向ける。

明日香は両手を上げてゆっくりと姿を現すと、顔を男に向けたま

ま壁際にしやがみ込んだ。

男は短機関銃を構えたまま近づいてくる。やはり、下着も取っておくべきだったか。

明日香は両手を上げたまま、ゆっくりと立ち上がった。肩をすばめ、媚びるような目で男を見た。震える声で英語の言葉を絞り出した。

「助けて——。命だけは助けて——」

「どうしたんだ。そんな恰好で」

「あつちで、あなたの仲間たちに——」

「呆れたな。何をやってるんだ、クソ野郎どもは。俺たちはただの犯罪者じゃないんだ」

吐き捨てるように言うと、短機関銃の銃口を下げた。もう一度、明日香を見ると上着を脱ぎながら近づいてくる。射程内に入るまであと一歩だ。

「これを着て——」

明日香の身体が回転し、右足が高く上がった。かかどが男の後頭部を直撃する。同時に頭をつかんで顔をすねに叩き付けた。男は動かなくなった。

脱ぎ捨てた服からペーパーナイフを出して、男の胸に向かって振り上げた。やれ、ひと思いに。高見沢の声が聞こえる。これを着て——、男は明日香に上着を着せようとしていた。

明日香はペーパーナイフを捨てて、男を引き起こすと、首筋に手刀しゅとう

を叩きつけた。

首の椎骨動脈ついでんどうみやくに打撃を加えると、失神させることができる。頸椎けいついを通じて脳への血流を圧迫し、一時的な脳貧血を起こさせるのだ。

アメリカ海兵隊の格闘技プログラムにも組み込まれていて、大きな力を使わずに相手を一瞬で倒すことができる。しかし一時的なものであり、数分で意識が回復する。

明日香は男を引きずって、近くの部屋に入った。

衣服を脱がして下着姿にした。途中、意識が戻りかけたが、再度、首筋を殴りつけた。

男のポケットにあった結束バンドで手足を縛った。意識が戻っても、当分は身動きできないだろう。

下着の上に防弾チョッキを付けて、その上に男から奪った迷彩服を着た。防弾チョッキで上半身はびったりだが、腰は数センチ大きすぎる。靴は大きかったが、紐をきつく締めた。

男は短機関銃と拳銃、9ミリ弾の弾倉をそれぞれ三個ずつ携帯していた。さらにポケットのスマホと無線機を奪った。

サングラスをかけて男が持っていた帽子を深くかぶると、よほど近づかなければ男女の区別はつきにくいはずだ。

部屋にあったガムテープで男の口をふさぎ、さらに立ち上がれないように何重にも拘束して、デスクに縛りつけた。

部屋を出て中ホールの見えるところに出たところで、背後から英語の声がする。

「どうかしたのか。持ち場を外れるなど言われてるだろ」

明日香は右手を軽く上げて、小便をする格好をすると、男が立っていたところに足早に戻った。

「小便もそこでしょ」という声と笑い声がして、足音が去っていく。

大ホールへの出入りが激しくなっている。

聞こえてくるのは英語ばかりだ。テロリストはほぼ全員が外国人ということか。

明日香は周囲に気を配りながら、大ホールに近づこうとした。しかし、大ホールの前には短機関銃を持った二人の男が立って、出入りする者を見ている。

大ホールに行くのをあきらめて、自分の警護官用のマイクとバッテリーを廊下の隅の植木の鉢の中に置いた。イヤホンを付けると、周囲の音が入ってくる。

エントランスホールは迷彩服の男たちの数は多いが、大ホールほど規律が取れてはいない。椅子に腰かけて休んでいる者も、何かを食べている者さえいた。

二、三度テロリストともすれ違ったが怪しまれる様子はなかった。

隅には多数のダンボール箱が積まれている。近づいてみると、弾倉や手榴弾の入った箱もある。その横に数個置かれているデイパックの一つを肩にかけた。

明日香はエントランスホールから隅にある警備員の控室に行った。そこには医療用の救急箱があるはずだ。

明日香は階段を使って四階の部屋に戻った。

「その格好で窓際に立つな。狙撃の対象になる。警官の前に出るときには、両手を高く上げる。できれば上着は脱ぐんだな」

明日香を見た高見沢が言うが、見た目にもかなり苦しそうだ。

明日香は取ってきた救急箱から、モルヒネと抗生物質の注射器を出した。鎮痛剤もある。

「モルヒネはいい。身体の動きが鈍くなる。痛みで死ぬことはない」「どうせ動けないですよ。痛みで正常な思考さまたが妨げられると困りますから」

「半分だけにしてくれ」

明日香は強引に高見沢の腕を出させ、モルヒネを注射した。高見沢の筋張った顔の筋肉が、わずかながら緩むのを感じた。

「殺したか」

高見沢の問いに明日香は答えない。

「テロリストのデイパックです」

明日香は中身を床に並べた。水のペットボトル、携帯食料、数個の手榴弾と発煙筒も入っていた。

「話をそらせるな。殺してないのか」

「結束バンドとガムテープで身動きできないほど縛ってきました」

「おまえなら、どのくらいで逃げ出せる」

「意識が戻って二時間です」

高見沢は壁の時計をちらりと見た。

「外部との連絡は取れそうか」

明日香は男から奪ったスマホと無線機を床に置いた。

「スマホは使えません。妨害電波です。無線機は相手の話が聞けません。無線機は官邸内部での通信に使っています」

ボリュームを上げると、入ってくるのは全て英語だ。

「イヤホンを貸してください」

高見沢はポケットからイヤホンを出して明日香に渡した。

「マイクを通路の植木鉢に置いてきました。中ホール入口の声を拾えます」

様々な声が入ってくる。そのすべてが早口の英語のうえ不鮮明で、明日香には聞き取ることができなかった。

明日香はイヤホンをスーザンに渡した。

「これを聞いてて。それに無線機も。何か変化があったら教えて」

明日香は高見沢にテロリストの様子を説明した。

高見沢は明日香が奪ってきた短機関銃を手に取った。

「MP5だ。拳銃もグロック22。アラブや北のテロリストじゃ手に入りにくいものだ」

「イスラム過激派や北朝鮮のテロリストじゃないということですか」

「カラシニコフやトカレフのような武骨な銃じゃないってことだ。洗練されている」

それに、と言って考え込んでいる。

「リーダーらしい男は、ボディアーマーの上に黒のアーバンアサル
トベストを着ていた」

「アメリカの特殊部隊ですか。デルタフォース」

高見沢の言葉に明日香が続ける。

警視庁、警視総監室のソファに梶元副総理は座っていた。背後
には秘書の長森が立っている。

梶元の前には高山警視総監がいた。

「相手から何の連絡もないとはどういうことですか。彼らは何のた
めに、こんな騒動を起こしているのです」

梶元が珍しく苛立ちいらだちを含んだ声を出した。官邸が占拠されて、す
でに四時間が経過している。

「それは私も知りたいことです。拡声器を使って呼びかけてはいる
のですが、返事がありません。官邸との通信は切られたままです」

「アメリカから、何か言ってきましたか。政府に対しては、無事救
出を望むとの大統領からの電話があっただけです」

ドナルド大統領は官房長官に電話をかけてきた。彼とは一度会っ
たことがあるが、副総理など念頭になかった。

「人質の中にアンダーソン国務長官がいることは伝えていきます。ワ
シントンDCは現在、午前八時です。大統領は寝ているわけではな
いでしょう。ホットラインがあります」

高山の言葉に、長森が屈み込んで梶元に囁いた。

「ホットラインの使用は早急かと。国務長官はたまたま総理と一緒にいただけだと思われます。国務長官の救出は我々の手で」

長森の声が聞こえたのか、高山がわずかに顔をしかめて言った。

「アメリカ国務長官の存在に、テロリストは気づいていると思いませんかね」

「それも不明ですが、おそらく、当日の晩餐会の相手は分かっているとされます。その上で強行したのでしよう」

やはりな、そう言って梶元は考え込んだ。

「このまま官邸に突入という手もあります。完全武装の特殊部隊が突入して人質を解放する」

高山が梶元を見つめて言う。

「その場合、人質はどうなりますか」

「最大限の安全を考えて救出を試みます。しかし、おそらく全員無事というわけにはいかないでしょう」

「犠牲者が出るということですね」

「もちろん総理と国務長官の救出は最優先に考えます」

ノックとともに入ってきたスーツ姿の男が高山に近づき、耳元で囁いた。

高山の合図で黒づくめの男が入ってきた。

身長百八十センチ以上ある、陽に灼けた精悍な顔の男だ。身体は引き締まり、しなやかなことが想像できる。腰には自動拳銃を下げ

ていた。

「S A Tの隊長、有馬隆ありまたかしです。彼が突入計画を立てました」

持っていた地図をテーブルに広げた。永田町の地図で首相官邸、国会、警視庁が入っている。国会から官邸に赤い線が引いてあった。

「一般には知られていませんが、官邸には国会に通じる地下道があります。前の戦争末期に、空襲を避けて時の総理が国会を行き来するために作られたものです。その地下道を使い、テロリストに先制攻撃を加えることができます」

「総理の官邸脱出用の地下道ですか。あれは高度成長期に、地下鉄工事と周辺の再開発で埋め戻されたと聞いていますが」

「そういうことになっています。しかし官邸からの強い意向で、現在の新官邸建設時に一部掘り替えを行い、残っています」

「その地下道にテロリストは気づいていないと」

「官邸内部への侵入経路にもなるということで機密にされ、今までに使用されたことはありません」

「今も使えるのかね」

「ドアが施錠されているということだけです。現在、詳しい図面を届けさせています」

「二十名のS A Tで官邸に潜入して、まず総理と国務長官を救出します。それが確認され次第、正面玄関と地下道から第二班が攻撃を仕掛けます」

「かなりの死傷者が出そうですね」

梶元から思わず出た言葉だった。

（つづく）